

東西文明の比較 (4)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

今回は、日本列島が約3万年前に始まったことを書きました。今回は、その続きを述べてみたいと思います。なお、専門用語をたくさん使用しましたが、興味をお持ちの方はウィキペディアなどをご参照いただきますと学生時代を思い出すのではないかと思います。

石刃技法の登場。ナイフ形石器とその生活文化

今から2.2万年から2.1万年前、九州鹿児島島の火山(桜島)が大噴火し、その火山灰は関東から東北地方にも降りそそぎました。その火山灰の層を始良^{あいら}といい、「始良層」と

いう日本の旧石器時代を測定する基準になっています。東京の西、武蔵野台地は関東ローム層という赤土の地層があります。国際基督教大学(ICU)の敷地内で発見された野川遺跡はこのローム層にあります。ローム層は厚さ4メートルに及び10の文化層で構成されています。その中に2層の黒土層(始良層)があります。この地層からは多くの石器が出土しました。

最深層(3.2～2.0万年前)から粗雑な石刃石器、斧形石器、礫器などです。2層(2.0～1.3万年前)からは石刃石器、ナイフ形石器、尖頭器、彫器など多様な石器。3層(1.3～1.2万年前)から細石刃石器(ナイフ形石器は消滅)。4層(1.2～1.0万年前)から両面調整尖頭器(石槍)を持つ石器群が発掘されています。

ここで注目されるのが最浅層から突然「石刃技法」が出現したことです。原石を加圧して石刃を何枚も剥ぎ取る技法で、一度に数多くの石刃を得ることができます。ナイフや槍先にも使うことができます。石材には黒曜石が最適ですが、黒曜石の原産地は限られています。東京の武蔵野台地にある

野川遺跡から出土した石器は16,000年前までは箱根産、それ以降の石器は長野県産の黒曜石でした。この時代に200キロを超える広域圏の交流があったのです。

石刃技術の発展でナイフ形石器が量産され、日本列島全土で普及します。ナイフ形石器文化といわれ、ナイフ形石器が優先する関東以西と、尖頭器とナイフ形石器が併用された東北以北に二分した文化圏ができました。

そしてこれらの石器を使って日本列島の住民はどのような生活を繰り広げていたのでしょうか。約2万年前氷河時代の厳しい自然の中で過ごす防寒衣服は、オオツノシカやヘラジカの毛皮で作られました。ズボンや靴はナウマンゾウや野牛ヒグマの毛皮を利用しました。

食料は大型獣・中小型獣の肉や血・内臓など。焼肉や燻製にすると同時に移動の際の携帯食料として干し肉としました。植物性食料については、東北日本の亜寒帯針葉樹林でコケモモ・クロマメノキなどの漿果類やハイマツ・チョウセンゴヨウの実です。西日本の落葉広葉樹林でクリ・クルミ・ヒシなどの賢果類やヤマブドウ・サルナシ・キイチゴなどの漿果類、ウバユリなどの根茎類が食用とされていました。当時本州から北九州に広く分布していたチョウセンゴヨウの実は栄養価が高く重要視されていました。加熱調理は水を入れた木器や樹皮製容器に加熱した自然石を投入し、煮たり蒸したりしました。

住居に関しては北海道の中本遺跡や長野県の駒形遺跡には浅い竪穴状の遺構の中に炉跡が発見されています。大阪河内平野の羽曳野(はびきの)丘陵の北にある「はさみ山古墳」には、東西6・南北5メートルの楕円形の竪穴住居があります。13～14本の柱で上屋を支え、住居の西隣に炉跡があります。ナイフ形石器などが238点も発掘されており、住居が生活の拠点になっていたことがわかっています。

細石刃文化と大陸文化との交流

ナイフ形石器が主体の旧石器時代は13,000年前ごろ終わります。ナイフ形石器に代わって登場し

た細石刃石器が日本列島に広がります。小さな石片を骨や角や木の軸に溝を掘って小さな石片を埋め込んで樹脂やアスファルトで固定(植刃)させて槍・銚・ナイフとして使います。実はこの細石刃式用具は世界の広範な地域から発見されています。

日本では長野県野辺山高原の一角の矢出川遺跡、新潟県荒屋遺跡があります。しかしこの両遺跡が示す文化は、石材や石器の組み合わせ、更には細石刃技法において全く異なります。矢出川遺跡の円錐形(または角柱状)の細石核を持つ文化は関東・中部南部・近畿・中国四国地方に分布し、一方荒屋型のクサビ形細石核をもつ文化は中部北部・東北・北海道地方に広く分布しています。クサビ形細石核を用いる細石刃文化はユーラシア大陸のシベリアで生まれ、モンゴル・中国北部・朝鮮半島など東アジアで発達しました。

「円錐形細石核文化圏」と「クサビ形細石核文化圏」という2つの文化圏は関東・中部地方を境にしたのでしょうか。関東以西の旧石器時代人は細石刃を取り付ける新式槍の着想は受け入れますが、細石刃の製法や石器の種類を取り合わせは、従来のもままでした。言い換えれば東北・北海道地方では新しい細石刃文化がナイフ形石器文化に取って代ったのですが、西日本では、古い在来の文化に新しい外来の文化を取り入れ変容させたといえます。

この「これまでと異なる文化」の誕生には自然環境の変化があるでしょう。約13,000年前から日本海の気候変動が始まりました。対馬暖流が徐々に日本海に流れ込むようになり海水温が上昇し、冬には日本列島に雪が降るようになりました。従来日本海沿岸は氷河時代のような大陸的な寒冷で乾燥した気候が続いていましたが湿った空気で覆われるようになりました。その結果、ブナやナラの森林が拡大しました。このような環境の変化によってマンモス、ヘラジカ、ヒグマ、野牛などが日本列島でも見られるようになり、シベリアに源流をもつ狩猟文化が広がってきました。

一方、太平洋岸を中心とした関東以西は氷河時代

以来の寒冷な気候が続き、比較的乾燥した地方はシベリア的狩猟文化を受け入れつつもこれまでと同様な生活が続きました。

やがて気候の温暖化により日本列島の植生が変化し、動物もナウマンゾウのような大型動物からシカやイノシシのような中小動物中心の狩猟生活となり、細石刃石器に加えて「落とし穴」の工夫などもなされながら狩猟と植物採集を合せた生活が続きます。が、上記のように日本列島は中部地方を境に2つの文化圏に色分けできる傾向は、旧石器時代に始まって以来今日まで続いています。

前回にも書きましたが、日本列島へ大陸の文化が運び込まれた玄関口は二つです。3～2万年前シベリア・バイカル湖周辺で誕生した文化は北海道経由して東北地方へ向かいました。黄河流域、長江流域で生まれた文化は九州地方を窓口として関西地方へ流入しました。その結果、南北に縦長の日本列島の気候の特色も加わって、西と東とで大陸の文化を受け入れ発展させた基盤が異なるのは旧石器時代に出来上がったと考えられます。

縄文時代の幕開け

日本列島の旧石器時代が終わると、日本独自の文化が芽生えます。縄文文化の誕生です。縄文時代は日本文化を大きく変えました。土器と磨製石器などを持つ新たな文化の誕生です。そしてその文化は現代に連なる点で大いに評価されます。ヴュルム氷期の終りが近づくと、厳しい寒さが次第に緩みはじめました。そのために約15,000年前あたりから、日本列島も温暖化が進みました。それにより、モミ、ツガなどの針葉樹林が姿を消し、ブナ、ナラなどを中心とする落葉広葉樹林が広まりました。多くの木の実が稔り、ニホンジカ、イノシシなどの中型動物が棲む豊かな土地になりました。温暖化が進み、海面が上昇し、山間の沢であったところが、浅い内海になると内陸より養分を含んだ河川が流れ込みました。プランクトンが繁殖して魚介類が繁栄。こうして縄文人には「狩猟・採集・漁労」の場が与えられたのです。

(以下は次号で…)